

# 外部評価委員会報告書

～平成19年度事業事後評価～

平成20年3月13日

① 研究所組織・運営上の進捗

	コメント
<p>a. 研究所の目的、理念に合致した運営を行っているか</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 職員の若返りや強化など、意欲的な運営の改革努力がみられる。</li> <li>・ 理事長の理念、運営方針が明確に示されている。この結果、研究所が一体となって運営されている。</li> <li>・ 十分に合致している。</li> <li>・ H18 から運営刷新とのこと、期待していました。その矢先の組織の統合とは驚きました。</li> <li>・ 研究成果の蓄積・人材育成と確保、継続してください。</li> <li>・ 目的、理念に合致した運営が強力にすすめられている。</li> <li>・ 高いレベルの研究が計画的に行われ、実績をあげていると思う。</li> </ul>
<p>b. 十分な研究及び業務の成果が出せるような運営を行っているか</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国際ネットワークの強化など、提携を活かして良い業務の成果が出せるよう努力されている。</li> <li>・ 人員を増やす強化の努力がされている。</li> <li>・ 人材の若返り、国際化、事務の効率的な強化など、研究所の活力の向上のための運営がなされている。</li> <li>・ 十分な成果が得られている。</li> <li>・ 「研究・業務の成果が出る」とは最終的には、国民全体の健康度が上がることだと思います。現状の社会では成果はないですね。</li> <li>・ 理事長のリーダーシップのもとに、十分な効果があがっている。それは運営のよさを示している。</li> <li>・ 特別研究員が効率的に活用されており、少人数で大きな成果が出ており評価できる。</li> </ul>
<p>c. その他</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 統合に際して、現在の積極的な運営を維持することを望む。</li> <li>・ 国として、健康・栄養研究所のような組織は将来の国民の生活を考えた際に、極めて必要性の高い組織といえる。</li> <li>・ 研究員の若返り→人材の流動は組織の活性化につながり、その後のネットワークづくりにつながると思う。</li> <li>・ アジアネットワークの実施、海外からの研究生、プログラムリーダー（海外からの研究者も入る）&gt;国際的なネットワークの構築望ましい。</li> <li>・ 病院における栄養食事療法についての今後の展開を期待する。</li> </ul>

## ② 6プログラムにおける研究の進捗状況、成果発表の状況

	評点(1~5点)	コメント
栄養疫学 プログラム	a. 計画・実施の適切性 [5・4・5・5・4・4] b. 達成状況 [4・4・4・5・4・4] c. 成果の発信 [5・5・5・5・5・4] d. 運営方法 [4・5・5・4・4・4]	(平成19年度実績について) ・提携業務を確実にこなしているといえる。 ・新しい分野の取り組みも意欲的である。 ・研究と業務の両方をバランス良く実施している。 ・膨大な業務を行いながら、質の高い研究成果を上げ、論文等とし発表しており、高く評価する。 ・特に問題はない。 ・国民健康労働調査(メタボ)→大規模調査の効率化をはかるには？ ・食事摂取基準(2010年版)→エビデンス(葉酸, Ca, Fe) 現場で活用しやすいものになる？ ・生体指標→Vk, エクオール、ミネラル出納、骨代謝 ・国民健康・栄養調査の集計業務は負担が大きいと思うが、重要な情報源である。  (平成20年度計画について) ・提携業務が円滑に行えそうな計画となっている。 ・特になし。 ・良くできている。 ・成果の発信に関して、国民一人一人に届いてないと思います。残念です。その方策も要望します。日本人にとってのエビデンスは急務だと思います。 ・生体指標プロジェクトの研究を食事摂取基準のエビデンスに活かせるようにしてほしい。
臨床栄養 プログラム	a. 計画・実施の適切性 [4・5・5・5・5・5] b. 達成状況 [5・5・5・5・5・5] c. 成果の発信 [5・5・5・4・5・4] d. 運営方法 [3・5・5・4・4・4]	(平成19年度実績について) ・糖尿病発症機序解明についての基礎的研究が進んでいる。 ・プログラムの名称と研究内容の整合性の工夫が欲しい。 ・ヒト、動物実験、コホートにより、基礎的で骨太な研究を実施し、順調に進捗している。 ・特に問題はない。 ・メタボプロジェクト、遺伝子同定(世界中で行っている)→予防治療に生かせるよう 栄養療法プロジェクト→予防・治療に生かせるよう インスリン抵抗性→新しいメカニズム ・極めて質の高い、先端的な研究が行われ、成果が公表されていることは高く評価されている。本研究所独自の研究をさらに推進するためには、他との連携と同時に、常勤スタッフの強化も必要と考える。 ・メタボリックシンドローム、栄養療法ともその成果は高く評価される。臨床への展開へと進めてほしい。  (平成20年度計画について) ・今日的な計画となっているが「臨床栄養」の要点との関連が欲しい。 ・日本人のメタボリックシンドローム、糖尿病発症の基礎研究として着実に、成果を上げており、計画についての段階の意見はない。 ・良くできている。 ・糖尿病発症メカニズム、遺伝因子の解明により、予防・治療の場で生かされるよう期待します。兼任研究とのことですが、研究に支障はないですか。 ・現テーマのさらなる成果を期待する。 ・日本人を対象としての解析であり、薬剤としての治療だけでなく、食事や運動も考慮した研究、解析を期待する。

<p>健康増進 プログラム</p>	<p>a. 計画・実施の適切性 [5・4・5・4・5・5]</p> <p>b. 達成状況 [4・4・4・4・5・4]</p> <p>c. 成果の発信 [4・4・5・4・4・4]</p> <p>d. 運営方法 [5・4・5・3・4・5]</p>	<p>(平成19年度実績について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・多様なテーマに対し多くの研究成果が上がっている。様々な解釈が可能な研究結果が出ているので今後の発展性が見込まれる。</li> <li>・運動、休養など生活に密着した重要な研究データが得られている。</li> <li>・十分に目的を達成していると考ええる。</li> <li>・運動 Mets (日本人のデータを) エネルギー代謝 加速度計 → 製品化されたものの精度は？</li> <li>・休養プロジェクト</li> <li>・大規模な介入研究結果から、エビデンスの集積が進んでいることを高く評価する。</li> <li>・加速度計による総エネルギー消費量や基礎代謝量の推定式を明らかにしたことなど評価出来る。</li> </ul> <p>(平成20年度計画について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・進めてきた研究がそのまま続けられるような計画となっている。</li> <li>・休養プロジェクトについては、目的が更に明確になる研究が望まれる。</li> <li>・特に問題点なし。</li> <li>・19才以下の指針策定 → 今まで子供の指針がなかったのは困ったことです。性別、年齢別でどのような目安が出るか期待します。</li> <li>・19歳以下の子供に対する運動のレビューを計画していたが、それをもとに運動基準(子ども)の作成に向けて貢献して欲しい。</li> <li>・高齢者についての対応も望む。</li> </ul>
<p>基礎栄養 プログラム</p>	<p>a. 計画・実施の適切性 [4・4・5・4・4・4]</p> <p>b. 達成状況 [4・4・4・4・4・4]</p> <p>c. 成果の発信 [4・4・5・3・4・3]</p> <p>d. 運営方法 [4・4・4・3・4・4]</p>	<p>(平成19年度実績について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎的な研究がよくまとまっている。</li> <li>・計画された研究が実践されている。</li> <li>・運動トレーニング、飽和脂肪酸、カロリー制限のそれぞれの影響に関する基礎的な研究であり、データの着実な蓄積が行われている。</li> <li>・問題点は特にない。</li> <li>・運動</li> <li>・飽和脂肪酸 → 脂肪肝</li> <li>・カロリー制限と寿命、脳卒中 → マウスでの実験結果がヒトでの結果と同一かどうか。トランス脂肪酸の問題は？</li> <li>・IF8.0以上のジャーナルに6編公表されたことは高く評価される。</li> <li>・遺伝子レベルの解析であるが意義は大きいと思われる。</li> </ul> <p>(平成20年度計画について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前年度からの連続性が見えない部分があるが、長いスパンでは連続しているものと考ええる。</li> <li>・この計画通りに進行することを期待したい。</li> <li>・エネルギー制限と障害発症の機序の解明を期待しています。</li> <li>・運動と栄養の相互作用も明らかにして欲しい。</li> <li>・重要な研究であり、日本人の糖尿病、生活習慣病の改善につなげてほしい。</li> </ul>

<p>栄養教育 プログラム</p>	<p>a. 計画・実施の適切性 [5・4・4・5・4・5]</p> <p>b. 達成状況 [5・4・4・5・4・4]</p> <p>c. 成果の発信 [5・4・4・5・3・4]</p> <p>d. 運営方法 [4・4・4・4・4・4]</p>	<p>(平成19年度実績について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本の食育の世界発信は意義深い。</li> <li>・一万人コホートの立ち上げは評価できる。</li> <li>・行動変容理論は広く応用できるので、発信が期待される。</li> <li>・媒体発信も良い。</li> <li>・食育、生活習慣病、介護という社会的ニーズ、影響に関わる地道な研究が着実に実施されている。</li> <li>・問題点はない。</li> <li>・食育プロジェクト フィールドを持つての効果検証は？</li> <li>・生活習慣病予防 佐久プロジェクト:大変興味深い</li> <li>・栄養ケアマネジメント 実態調査 →基準の統一は？</li> <li>・生活習慣病予防プロジェクトの成果は評価される。</li> <li>・介入方法により、成果に違いがでると思われるが、対象者のモチベーションをいかに上げるかの方法などについての研究を望む。</li> </ul> <p>(平成20年度計画について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大変期待される点が多い。</li> <li>・この計画通りに進行することを期待したい。</li> <li>・食育(定着・環境整備) →フィールドを持つて経時変化効果検証を。</li> <li>・栄養ケア →早い時期に基準の設定を。</li> <li>・高齢者の要介護問題は大きな課題である。是非成果をあげて、国民一般に広報してほしい。</li> <li>・嚙下評価方法の統一についても検討してほしい。</li> </ul>
<p>食品保健機能 プログラム</p>	<p>a. 計画・実施の適切性 [4・4・5・4・4・4]</p> <p>b. 達成状況 [5・4・4・4・4・5]</p> <p>c. 成果の発信 [3・4・4・3・4・4]</p> <p>d. 運営方法 [5・4・4・3・4・4]</p>	<p>(平成19年度実績について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・提携業務を確実に遂行していると言える。業務に関連の深い研究テーマが選択されている(抗酸化性に重点をおいて展開できている)。</li> <li>・トクホに関する分析、評価に係わる重要で責任ある研究を、着実に実施し、成果を上げている。</li> <li>・問題点は特にない。</li> <li>・食品分析プロジェクト(特保)</li> <li>・補完成分プロジェクト(トコトリエトル)</li> <li>・食品機能プロジェクト(抗酸化物質) 食品全体トータルに測定するには？</li> <li>・現在極めて国民的ニーズの高い分野であり、その取り組みは順調である</li> <li>・食品の抗酸化力の測定は、今後更に進めてほしい。</li> </ul> <p>(平成20年度計画について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・提携的業務を能率的にこなす計画が立てられている。</li> <li>・他の成分について適用をどうするか、これから考慮すべきです。</li> <li>・収去食品</li> <li>・特保 →データベース化は必須です。 ・民間委託？</li> <li>・測定技術の標準化 →すでに行われていることかと思いましたがまだだったのですね。</li> <li>・成果のうち、国民のニーズの高いものを早く発信できるようにできないか検討して欲しい。</li> <li>・食品の安全性が求められる中、信頼できる分析を引き続き行ってほしい。</li> </ul>

③2センターにおける業務の進捗状況、成果の社会等への還元状況

	評点(1~5点)	コメント
情報センター	<p>a. 計画・実施の適切性 [4・4・5・5・4・4]</p> <p>b. 達成状況 [4・5・5・5・5・4]</p> <p>c. 成果の発信 [5・4・5・5・4・4]</p> <p>d. 運営方法 [4・5・5・4・4・4]</p>	<p>(平成19年度実績について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・栄養に関する情報発信が十分にできている。</li> <li>・所内の研究成果の発信に役立っている。</li> <li>・地味だが、非常に重要な情報を充実させて、積極的に発信している。</li> <li>・情報管理、ジャンクメール対応にも配慮し、適切に運営されている。</li> <li>・情報発信は適切であり、今後ともこの方向を維持してほしい。</li> <li>・健康食品情報 ⇄専門職 速報性あり ⇒国民</li> <li>・健康・栄養情報 一般・高校生向けのオープンハウス好評</li> <li>・IT 支援</li> <li>・スタッフが各自の専門分野の仕事を進めながら情報センターの仕事に大部分をさいてセンターの事業を進めていることに敬意を表する。</li> <li>・一般から専門家までの情報発信がなされており、評価できる。</li> </ul> <p>(平成20年度計画について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・連携を考慮している点は重要である。</li> <li>・特になし。</li> <li>・エビデンスに基づく情報発信機関として、継続してください。</li> <li>・オープンハウスは中高生のみではなく一般の人々にもお願いします。</li> <li>・健康、栄養関連の情報源であることを引き続き発信して行くことが重要と思う。</li> </ul>
国際産学連携センター	<p>a. 計画・実施の適切性 [4・4・5・5・4・5]</p> <p>b. 達成状況 [4・4・5・4・5・4]</p> <p>c. 成果の発信 [5・4・5・4・4・4]</p> <p>d. 運営方法 [4・4・5・3・4・4]</p>	<p>(平成19年度実績について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生物統計プロジェクトリーダーの着任が評価できる。</li> <li>・NRに関する努力がひき続き行われている。</li> <li>・非常に多くの業務を行っている。</li> <li>・問題点はない。</li> <li>・国際栄養 ネットワークづくり・セミナー</li> <li>・ニュートラシューティカルズ(大塚製薬) 寄付講座 エクオールトライアル</li> <li>・生物統計</li> <li>・NR 順調 セミナー</li> <li>・国際交流、共同研究などの取り組みは評価できる。</li> </ul> <p>(平成20年度計画について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今までの優れた研究が続くように工夫されている。</li> <li>・今後 WHO、Codex 等への積極的な関与を期待する。</li> <li>・特になし。</li> <li>・NR取得後、その能力が現場で生かされるように期待します。</li> <li>・一般の人の素朴な疑問に答えられるように。</li> <li>・現場に立ってこそ、初めて国民への教育効果が上がると思います。</li> <li>・本研究所のような比較的小さな組織では連携は今後も極めて重要になる。さらに前進することを期待する。</li> <li>・今後のNRのあり方についての検討が重要になると思われる。</li> <li>・多方面からの検討を望む。</li> </ul>

④ 研究所全体としての中期目標・計画に関わる事項の進捗

	評点(1 ～5点)	コメント
a. 年間の論文及び学会等での研究成果の発表の状況	5・5・5 4・5・5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・十分な論文発表があると考ええる。</li> <li>・ホームページの充実ぶりは特筆すべきものである。</li> <li>・予定以上の発表があり、問題点はない。</li> <li>・論文数が多いですね。</li> <li>・研究所の規模からみて、質的量的に極めて高い研究成果をあげている。</li> <li>・人数に比較し、多くの論文が出されている。</li> </ul>
b. 研究成果の社会への還元状況 (セミナー、ホームページからの情報提供、知的財産の活用等)	4・5・5 4・4・4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・十分な活性化状況にあると言える。</li> <li>・ホームページの充実ぶりは特筆すべきものである。</li> <li>・還元も適切に行われている。</li> <li>・食の安全、健康問題への関心が高まった今こそ研究成果の社会還元を。草の根的に情報発信はあきらめず、継続することが肝要だと思います。</li> <li>・信頼できる情報発信源としての活動を継続してほしい。</li> </ul>
c. 他の機関との連携の状況(連携大学院、共同研究、国際協力、人材育成等)	4・4・5 3・4・4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実績が保たれている。</li> <li>・優れている。</li> <li>・各研究テーマ、他機関の研究内容と重なる部分が多いと感じます。このあたり調整してムダなく研究成果を上げることはできないでしょうか？</li> <li>・多くの機関、施設と連携がとられ、実績を上げている。</li> </ul>

## ⑤ 総合的な評価

- ・改組の予定を前に、第2期中期計画の中で、研究所の理念がより明確に打ち出されていることが評価される。
- ・業務・研究遂行への意欲は非常に高く、国際的に評価できる論文数が各種独立行政法人のなかで圧倒的に多い。
- ・現在の機能はどれひとつとして縮小できるものではなく、改組が仮にあったとしても、是非、現在の機能は完全に残されることが望まれる。
- ・疾病予防の要素は栄養及び食にあるので、是非この点が強く認識されたい。
- ・国民の栄養・健康に関する唯一の研究機関であり、現在の機能を一層充実させることを期待する。
- ・多くの研究業績と、行政、国民対応業務を見事に両立させている。
- ・研究成果の多くは、指針、食育などに結びつくものであり「プログラム毎のまとめ」とともに、似た分野をひとまとめ(例えば、運動の効果)にして表現することも、研究所の成果の理解の促進に役立つと思う。(タテとヨコから見る)
- ・国民栄養調査、DRI の策定など、国民生活に極めて重要な健康や栄養についての今後の指針を作る上でキーポイントとなる作業も行っており、国として、今後とも本研究所の機能を維持すべきである。
- ・「病気になる前にまず食生活を整えて健康の維持、増進を」はだれもの願いです。日本人の食環境は大きく変わりました。どんな社会状況にあっても国民の食生活、健康状態を追い続けてきたのはこの研究所です。他国にないデータの蓄積、分析等を今後も継続していただきたいです。医療費の削減をいうなら、予防に力を入れてほしい、子どものさまざまな問題をいうなら、日々の食生活に目を向けてほしい、高齢者のQOLを語るなら、栄養状態を見てほしい、と痛切に思います。以前とは比べられないほど、オープンになり、情報発信もしている国民生活の近くに存在するこの研究所の機能を守り続けてください。微力ながら応援しております。
- ・研究所の目的意識がはっきりし(より明確になり)、各構成員が意欲的に取り組んでいる様子を敬意を表す。理事長のリーダーシップと各プログラムリーダーが一体となって仕事を進める組織のあり方と、研究スタッフの質の高いこと、支援スタッフの多いことが、それを可能にしていると思う。22年度以降の改革をむしろよい方向にとらえ、さらにステップアップすることを期待する。このような優秀な研究所は、むしろ強化すべきであると考え。
- ・おおむね順調に研究成果が上がっている。研究所の運営についても評価できる。統合後の研究等が懸念されているが、人間栄養学の視点に立った研究が続けられるように研究所の機能は残したままでの対応が望まれる。



## 独立行政法人国立健康・栄養研究所外部評価委員会委員名簿

平成20年3月現在

氏 名	所属・職名
○ 五十嵐 脩	社団法人 栄養改善普及会会長 お茶の水女子大学名誉教授
伊藤 裕	慶應義塾大学 医学部教授
加藤 則子	国立保健医療科学院 生涯保健部長
逢坂 哲彌	早稲田大学理工学術院 教授
川島 由起子	聖マリアンナ医科大学病院 栄養部長
加賀谷 淳子	日本女子体育大学 客員教授
林 徹	独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構 食品総合研究所 所長
豊田 正武	実践女子大学 生活科学部教授
三保谷 智子	女子栄養大学 出版部 編集委員

○ :委員長